



国道に打ち上げられた大型漁船 PHOTO：倉本信之

難させた。

だが、まだ余震が続いていた。踊るように動く屋根、地割れする道路。人々は叫び、大声でわめいていた。揺れは繰り返して襲ってきたが、私には行かねばならない場所があった。私が管理しているもう一つの施設、児童センターにも、まだ子どもたちがいたからだ。児童センターは遠くない。すぐさま駆けつけたところ、幸いスタッフの迅速な判断で子どもたちは安全な屋外に避難していた。「よかった。」

安堵をしたのも束の間、津波襲来の情報が伝わってきた。幸い二つの施設は津波の心配はない場所にあったので、屋外待避によってひとまず安全は確保できたと判断した。

子どもたちの安全を確認した後、私は、知人やお年寄りが多く住む海岸近くの住宅地に車を走らせた。海側から内陸に向けて、つまり西へ西へと急ぐ対向車は、すでに数珠つなぎになっている。「今、津波が押し寄せてくるぞ！どこ行くんだ！」私に向かってウィンド越しにどなってくれた人もいたが、それでも心配で車を走らせた。そして、なんとか

目的の場所に辿り着くと、そこには多くの知人がいた。その人たちと合流して、海岸に近い小高い丘に避難した。ここにも沢山の人が集まっていて、心配顔で海を見つめていた。そのとき、津波はやってきた。

津波が、すべてを…

ここは松川浦という県立自然公園にもなっている風光明媚な海岸で、のどかな美しい松林が続いていた。

濁流となった津波は、その防風林の大きな松の木を瞬時に根こそぎ掘り起こし、なぎ倒し、停泊中の漁船やレジャー用のモーターボートを軽々持ち上げて運び、列をなしていた電柱をことごとく押し倒し、自動車を、そしてついに家々を倒壊させ、流し去った。

壮絶なるエネルギーだ。

私はいかなる感情もなく、ただただ眼前の光景を見続けるよりなかった、そのときは。

幸いにも津波は拙宅の庭先まで来て、そこで止まってくれた。海岸から1キロほどある